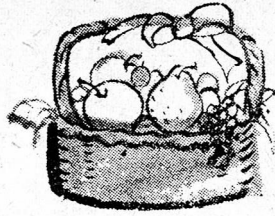


上り函館本線に乗って秀峰駒ヶ岳山麓を
上り峠のトンネルを二つくぐると、眼下に
大野盆地が開け、遠く函館の港につき出し
た臥牛山が望まれる。この盆地に入ると杉
やヒノキがあり、植物の様相はもろろん、
村そのものの気分も一変することに気がつ
くであろう。一般に北海道の農村は直線道
路がどこまでも続き、広々とした感じはす
る。が家屋の周囲には樹木も少なく、なんと
なく寒々とした感じを与えるものだが、こ
の盆地に入ると生け垣越しに苔の生えた草



果樹栽培發祥地

としての道南

舟 茂 宣 雄

屋根が見え、七飯駅から函館に至る左側に
は松並木が続き、府県の街道という感じも
する。

この地方こそ北海道開拓の先駆地であ
る。

屋なお暗い原始林に斧を入れて初めて文
化の光を導入したのは数百年の昔。当時を
しのご資料として今日伝わるものの乏しい
のは残念であるが、これは榎本武揚などに
より大戦場となり梟雄土方歳三の戦死の地
ともなつたため、いつの時代でもそうであ
るが、後難を恐れた当時の人々はいろいろ

な記録を焼き捨てたことも一因となつてい
る。しかし大野村では約三百年前に水稲を
試作したといわれ、田中知事揮毫の北海道
水田發祥地の碑も建てられている。ここか
らほど近い小山にヒノキをまじえた杉林が
あり、その奥に小さな祠がある。いつ誰が
植えたのかわからないが、この林の中の大
きな杉は大人三人でも抱えきれぬほど、樹
齢五百年と推定されている。近頃は植樹が
奨励され植樹デーの設定さえあるが、とも
すと残りの三百六十四日は伐樹デーにな

り易い現代に比べ、五百年も前に杉苗を植
え、部落の人々も代々これを愛護してきた
ことは誠に感慨深きものがある。たとえ書
き残された記録はなくても、この老杉が数
百年の歴史を物語っている。老木は郷土の
誇である。

記録が明らかとなつてからでは、明治元
年五月独乙の商人ガルトネルが今日の七飯
村に開墾を申請している。この農場はいろ
いろ問題となり、明治三年十一月に開拓使
が接収し開墾場と改称された。その後七重
開墾場、七重農業試験場、七重勸業試験場

などいろいろな名称は変つたが、とにかく農
畜全般の試験ばかりか水車製粉や畜産加工
に至る、すこぶる広汎な仕事を行つていた。
おそらく試験機関としては本道はもろろん
日本としても最初のものでその構想の大き
かつたことも特筆すべきであろう。ガルト
ネルが持つてきた種苗はおそらく歐洲系
ものだろうが、残念ながら今日に伝るもの
は少く、現在七飯村長である田村半吾氏の
果樹園にガルトネルと名づけられるブドウ
の品種が保存されているくらいである。開
拓使の手に渡つてからは専ら米国のものが
輸入され、明治四年に種牡馬、六年に種豚
七年に洋牛、八年に綿羊が入つている。ま
た明治六年にはブドウ、リンゴ、ナシなど
の苗木二千本到着と記録されている。七飯
役場に保管されている当時の写真を見る
と、牧草地やサイローもあり、大農具一式
揃つており、ブドウの仕立て方も垣根作り
で蕊を止め、一切が米国の直訳農業であつ
たようだ。そしてここで増殖された種苗は
近郊はもろろん遠く府県まで行き、ブドウ
苗のごとき岡山まで行つている。また府県
からは接木技術を修得するため、わざわざ
来場する人もあり、果樹栽培の幼稚な当時
としては唯一の果樹先進地として光をかか
げていたことであろう。

さてかように農業、とくに果樹の發祥地
でもあつたこの盆地の現状はどうかという
に、發祥地は必ずしも先進地としての王
座を持続するとは限らず、幾星霜を過ぎ
る間に王位は他に移つていく。これにはい
ろいろな原因が数えられる。北海道開拓の

進展とともに政策の重点は奥地向けられ
たこと、これに伴つて明治二十七年には
試験場も廃止され農業の中心を失つたこと
も関係している。またこの地方はすでに農
業の基礎を持ち気候も比較的温和であるた
め、とくに努力しなくても一応の生活はでき
たことも、死活を争う奥地開拓のキビシイ
努力とは様子が異なつてきた。

現状は必ずしも往年の生氣ありとはい
われないが、将来はどうであろうか。自然
条件としての天恵が失われたわけでない。
府県に比べやや温度は不足するが、これは
品種の選択や技術によつて十分解決され
る。しかも和梨にしてもリンゴにしても、
品種によつては他の追従を許さぬ優良品の
生産も可能である。問題は栽培研究の意欲
の如何にある。さき頃来た青森のリンゴ娘
は各地で歓迎された。かつては苗木を分与
し技術を伝授した後進地の發展を喜ぶこと
は腹の太さを示す美談として後世に伝うべ
きであろう。しかし果樹業者がかわいい娘
の顔を見てただ喜んでいただけでよいもの
だろうか。なぜ自分を反省しようとしな
いか。天恵の上に眠つていては發展はな
い。しかし一部には果樹に対する関心も深
まつてきつとあり、町村によつてはすでに
増殖計画の実施に入つた所もあつて、近き
将来に明るい希望の持てる所もある。

かように過去現在未来と考へてみると、
まことに世の中の盛衰浮沈の波は激しいも
のだ。世の移り変りを岳の上に立つ老杉は
いかに眺めていることであろう。(筆者は
北海道農業試験場・渡島支場長)